

街のシンボルである『シェンティア学園』分館は、五年前にこの地に建てられた。『マーデル・プラッタ』は、この学園ができたことで住人が増えたと言っている。

本館は、ここより西のネイクス大陸にある。分館は本館に比べるとかなり小さく、貴重な蔵書等も本館にしかない。

では、どうしてわざわざ別大陸の、それもこんな南の地に分館が建てられたのかというと、その理由こそネックたちの仕事に関係する。

この学園の存在意義は、大きくわけてふたつ。

ひとつは、世界の海流についてより詳しく知ること。

もうひとつは、考古学の観点からエアルス歴史を紐解くこと。

そのふたつの意義を満たす「鍵」になるものこそが、漂着物である。

もちろん漂着物というものは、『アリーベ』以外の海辺でも見られる。しかし、歴史の解明において意味を持つ文化財や、希少性のある古物の類は、どういうわけかほとんどアリーベに流れ着くのだ。

これはアリーベ近海の「フィネイル海流」が何らかの重要な役割を果たしているためと考えられているが、真相についてはまだ研究の最中にある。

海流を知るということは、世界と歴史を知るということ。

だからこそこの学園は、ネックたちの運んでくる漂着物を研究対象として受け取ってくれるのだ。

「差し入れも買えやし、行くか」とネック。

市場を抜けた一行は、崖の段ごとに造られたいくつかの階段を上り、学園を目指した。やがて、岩山の頂上——円形の噴水がある広場に到着し、一行は息をついた。ここは学園の敷地内だ。

「着いたね」

リアムが大きく伸びをした。

広場には学生数名の人影があった。霧雨は止み、徐々に日差しが差し込んできていた。

「ノア。後ろ見て」

リアムの言葉に、ノアは「？」という顔をしながら振り返り、思わず、

「わあっ……！」

吹き渡る風で、青空を流れる雲が早い。街を眼下に、その先には雄大な草原と森、そして海が広がっていた。

ノアに並び立って、リアムは言った。

「ここから見る景色、好きなんだ」

「絶景だよなあ」

ノランも頷いた。ネックは三人のやりとりを聞きながら、邪獣がやってきた方角を確認していた。

一行は広場のベンチで手早く昼食を取り、時計塔の隣にある大きな校舎へ向かった。

出入り口で入館手続きを済ませ、校舎二階にある研究室へ。

おそらくそこにいるだろうという予想の元に赴いたが、これが見事に当たっていた。

ネックがドアを開けると、机に向かっていた制服姿の男子学生が、顕微鏡から顔を離して横目でこちらを見、それから思い切り眉根を寄せて、

「……何の用だ」

黒縁眼鏡のブリッジを押さえ、不機嫌そうに口を開いた。

ネックの後ろからリアムが顔を出し、

「ごめんね、突然来ちゃって」

「……リアム」

今度はノランが顔を出し、

「よっ」

「……」

制服姿の学生——ロインは、ネックを睨んだ。

ネックが肩をすくめると、ロインは大きくため息をついて、

「……どうぞ」